

「タブー視される死」を超えて

「タブー視される死」を超えて —オンライン・コミュニケーションで受容される死に関する考察—

阿部 純

(人間文化学部 メディア情報文化学科)

本論では、P. アリエスの「タブー視される死」を手掛かりにして、死の社会学において語られてきた死の受容について概観し、サイバースペースですでに起こりつつある死をめぐる諸展開①データベース型②用い型、そして①と②のどちらの機能も併せ持った③併合型ウェブサイトの事例整理と、先行する SNS コミュニケーション分析研究の整理を行う。これらの事例分析から、サイバースペースと死の受容とがいかに近接しつつあるかについての考察を提示する。

【キーワード 死 デジタル・メディア サイバースペース】

1. 問題の所在—サイバースペースと死

2008年4月、墓石とQRコードを組み合わせた新しい墓が販売された。QRコード付き墓石を販売するのは山梨県にある石の声株式会社で、QRコードに関するシステムは株式会社IT DeSignがデザインした。「供養の窓」墓石の意志の扉を開けた正面にQRコードがあり、それに端末をかざすと故人のプロフィールや映像、思い出の写真が見られる仕組みになっている。販売価格は100万円ほど、ゆくゆくは墓石の前に立たずとも遠隔で墓参できる仕組みにしたいという。携帯端末と墓とを融合させた興味深い事例として、このQRコード付きの墓は各種メディアに紹介された^①。

その後、アメリカをはじめカナダ、中国、台湾、イギリスなど、世界各国で同様のQRコード付きの墓が発表され、その都度各国のメディアを賑わしている状況があることは特筆すべきことである。私たちの日常のコミュニケーションが、携帯電話やパソコンを介した電子コミュニケーションが主流となったいま、墓だけが旧態依然として石のまま取り残されていたとも言える。故人の記録が直筆物だけでなく、電子メールやデジタル写真や映像などあらゆるメディアによって保存、記録されるのが常となり、墓石に対する個人への想像力が著しく減ってきているということもあるだろう。

「私のお墓の前で泣かないでください」とテノール歌手秋川雅史が歌って話題になった時が2006年であり、インターネット元年とも言われる1995年から10年が経ち、電子コミュニケーションの延長上にある死の捉えられ方を改めて整理する必要があると感じる。特に、本論の中で取り上げたいことは、ソーシャル・メディア・コミュニケーションの延長上にある死の受容についてである。2004年にサービスを開始した世界最大のソーシャル・メディアであるFacebookユーザー数は2000万人を超え^②、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(以下、SNSと略す)アカウントにおける死の受容ということも日常の中で起こりつつあ

る事態と考えられる。しかし、ことソーシャル・メディアにおける死の受容となると、分析が進んでいないのが現状としてある。

そこで、本論では主に欧米でやられている研究を読み解きながら、電子空間と死の受容に関する問題について下記の3段階に分けて推敲し、今後の実地調査につなげていきたい。まずは、死の受容に関する社会学的、文化論的なマッピングを行い(2章)、続いてソーシャル・メディアをはじめとする死後のコミュニケーションを担保するオンラインのサービスについて俯瞰する(3章)。その後、アメリカで展開されているSNSと故人アカウントの死の受容に関する論文を読み解きながら(4章)、いかにサイバースペースと死の受容とが近接しつつあるのかについて考えていく。このサイバースペースでの死の受容状況を、どのように死の社会学の射程に位置づけ、そして、それらに対してどのような分析アプローチが可能かを考察することが、本論の重要な課題となる。

2. 死の受容を捉える指標

2-1. さまざまな「死」を見つけること

死と社会学ということ言えば、当該時代の社会状況に合わせて、あらゆる死の形が語られてきた。情報社会において、「バーチャルな死」「リアルな死」という区分もでき、間接的にメディアによって感得される死と、自身の中でリアルと感じられる現前する死とを分け、従来からあったとされる私たちの死生観にどのように影響するのか、といった心理学、認知研究も多く行われている。(藤井、2003) 近年、見出された新しい「死」という点では、死の社会的次元として「法的死や「儀礼的死」の存在を掲げている。(澤井、2005) さらには、中森が現代日本の特徴的な死として「無縁死」を加えたように、その時代の共同体・家族のつくられ方やそれを伝えるメディア、作品などによっても死の形は多様化し、時代の特徴を示している。(中森、2011) 社会の中で論じられる死の形は、そのまま当該社会における関心の諸相にもなりうるのである。

そもそも、私たちが日常的に言う時の「死」とは、病院や臨床の場で医師によって判断される「死」のことを指しており、周囲の人びとの判断に基づいた死として、「生物学的死」と呼ばれる。D. サドナウは、病院での死のエスノグラフィーを通して、

身体検査によって「死の徴候」が現れる「臨床的な死」、つぎにいわゆる細胞活動の停止という「生物学的死」、最後に第三のカテゴリーである「社会的な死」である。〈中略〉おそらく「臨床的にも」「生物学的にも」生きているにもかかわらず、病院という環境内において患者を本質的に死者として取り扱う時点で判別される死である。(Sudnow 1967=1992:128)

「タブー視される死」を超えて

と病院内における死を区別している。関水が指摘するように、D. サドナウは死のプロセスの一側面として死を語るべきと主張しており、E. ゴフマンの「ノンパーソン」概念に引き付けた「社会的対象でなくなるプロセス一般」としての死のあり方について紙幅が割かれてこなかった。(関水、2010)

「社会的対象でなくなる」という意味での「死」は、内実として「生物学的死」から離れ、死が比喻でしかなくなるという批判ももちろんありうるだろう。しかしその一方で、人びとが古来から墓という形で死を保存してきたように、人が社会的対象として「生き永らえる」という状態もまた死の社会学的諸相として位置付けられるべきことであると考え。こと、「サイバースペース」においては、「社会的対象でなくなる」ということを乗り越えるかのごとく、「社会的対象として生き続ける死」の受容が、日常のSNS コミュニケーションの延長に起こり始めていることも事実である。サイバースペースにおける死の受容とは、先の「バーチャルな死」「リアルな死」との区分からも分岐し、サイバースペースに自己を仮託し、その延長上にある「生物学的死」についてサイバースペースを利用してどう引き受けていくか。ここに死の社会学的諸相の余白が残されている。日本における死とサイバースペースとの関連を語るものに関して言えば、「インターネット上での死の誘惑」(後藤、2002) などがある。これは本論で取り上げる死後のアカウントや故人の死をいかに扱っていくかではなく、インターネットという未曾有の情報体の中で、不可知であるがゆえに多様な解釈・想像力を喚起する死のさまざまな姿が取り上げられてきたか、という論説である。特定の人と人之間や同人誌のような紙媒体で共有される死にまつわることから、不特定多数同士のやり取りの中で交わされる「死」へと議論の舞台は空間を増やしつつあるのである。

2-2. 「タブー視される死」を超えて

P. アリエスは『死を前にした人間』の結論部分で、当該社会における死のあり方を5つの言葉でまとめている。①「飼いならされた死」(The Tam Death)、②「己の死」(The Death of the Self)、③「遠くて近い死」(Remote and Imminent Death)、④「汝の死」(The death of The other)、そして⑤「タブー視される死」(The Invisible Death)である。(Aries、1975=1990) 信仰や産業、医療技術などによって、死が日常から離れつつあることを言明し、宗教的世界観はもはや社会の一部にしか通用せず、死への恐怖や不安ばかりが増強するばかりになることを指摘している。

死は後退した。そしてそれは家を離れて病院へ移った。今、死は日常的な親しみ深い世界にはいない。現代人は、そうたびたび死を間近に見るということがないので、死のことは忘れてしまった。かくて死は野性的な存在となった。(Aries、1975=1983:266)

現代における死のあり方を「タブー視される死」と捉え、忌み嫌われ、日常生活から切り離され、病院における医学的処置の対象になった死をめぐる状況を批判し、後続の死の社会学に大きな影響を与え続ける論考となった。

P. アリエスの議論における共同体の宗教的世界観の弱体化によって「死は野生化」という考え方、日常的な親しみ深い世界ではなく病院へと移って「タブー視される死」という状況自体はいまなお続いているように見える。P. アリエスが指摘する、現代人は死を避けられないにも関わらず、死を忘れようとしてきたという点において、次に論点となったのは「社会的死」もしくは「社会的生」という観点である。個々人の死の迎え方が「野生的」になったとしても、死を悼む感情は健在であり、時と場所によって形や存在意義を変えながら墓と云う形で個人は保存されてきた。ましてや、現在においてはデジタル・メディアによって、故人の日常的なつぶやき、アイディア、表現といったものが吐き出され続けている環境がそろうている。そのように考える時、「社会的死」のあり方は、墓石だけの時代とは様相を異にするとも考えられる。

Specifically, we consider the ways in which Facebook is associated with an *expansion* of death-related experiences –temporally, spatially, and socially. Facebook creates a new setting for death and grieving – one that is broadly public with an ongoing integration into daily life. Critically, this is not simply about death, but about the trajectories of social engagement *around* death (Brubaker et al, 2010:2)

「生物学的死」は家を離れたままであったとしても、それと並行して語られる新たな「死」のあり方については、サイバースペース上で起こっている墓的なものの変遷を見ていくことによって考察可能になるのではないか。詳細は4章で後述するが、BrubakerらはFacebookやMySpaceといったSNSでの人びとの追悼行為に着目し、死をめぐるすでに起こっている新たな「社会的死」の見取り図を展開している。その準備段階として、本稿ではサイバースペースの中で起こりつつある日本の墓的なものにも目を配りながら、死をめぐるオンライン・コミュニケーションについて概観し、これからの死の社会学を進めるにおいての一考察を示したい。

3. ウェブサイトと死

本章では、これまでに確認された電子空間における故人の扱われ方、遺族をはじめ残された人たちのオンラインを介した繋がり方について、アメリカと日本で行われている主要サービスを中心に整理していく。これらのウェブサイトは、主に①故人の情報を管理し、共有し

「タブー視される死」を超えて

合うデータベース型のもの、②用い型の仕組みをあわせもつもの、そして①と②との両方を兼ねそろえたもの③とに分けられる。

3-1. データベース型

・MyDeathSpace.com

不慮の事故や犯罪に巻き込まれるなどして故人となった人びとのプロフィールを共有する会員専用サイトで、故人の写真や死に際しての出来事を記すテキスト、関係するサイトアドレスを書き込める仕様になっており、ユーザーたちはそのページに追悼のコメントを送ったり、故人の死に方についてコメントし合うといったことを通じて、死と向き合いコミュニケーションをしている。故人ページのほかに、Forum ページも設けられており、「そもそもMyDeathSpace.comの存在意義とは何か」といったことから、故人ページのアーカイブを引きながらその死について語り合うスレッドや、テクニカル・サポートに関するスレッド、全く本旨に関係なく自由度の高いテーマ設定のスレッドが立っており、日夜議論が行われている。これらのスレッドには、会員になる際に登録したハンドルネームが使われることとなっている。若者向けに作られたサイトだということもあり、アーカイブされている故人の多くは10代20代が多い。

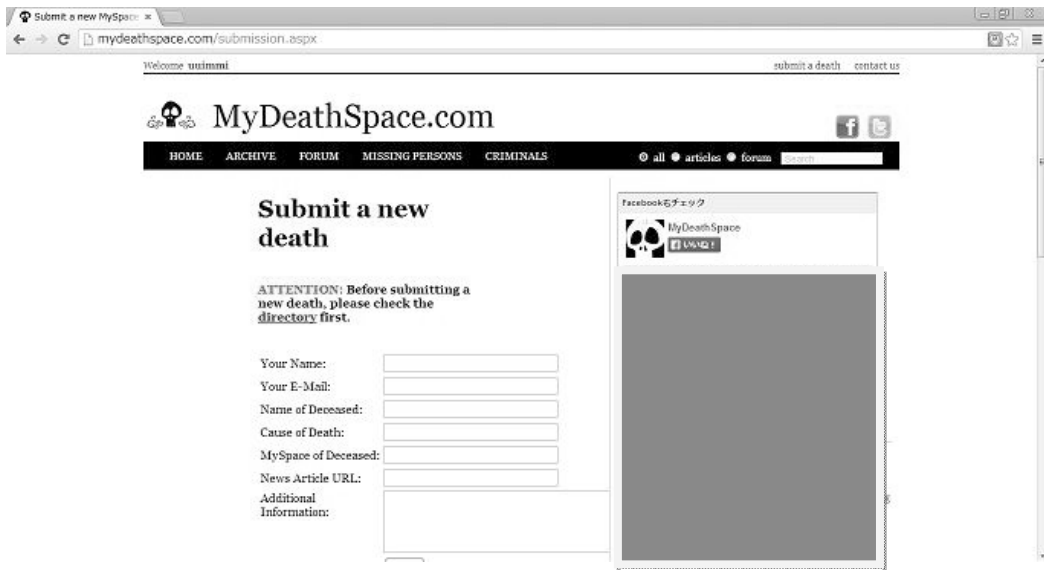


図1 MyDeathSpace.comでの故人ページ申請フォーム

※一部、故人の個人情報のため、筆者によって青く囲った部分がある。

図1を見てわかるように、故人の記録を残す際には、記録する人の名前(ハンドルネーム)、メールアドレスと、故人の名前、亡くなった理由、場所、死亡記事や葬式会社の葬式の記録などその故人の死に関連するサイトアドレス、その他の情報を書くようになっている。”News Article URL”をクリックすると、オンラインのニュース記事がリンクされるものもあれば、葬式会社が提供するセレモニーの案内記事や他の故人記録サイトの故人ページにリンクするものもあり、一般的な故人が故人のページとして上げられる選択肢の多さをこういったところからも知ることができる。

・日本における墓のデータベース

日本では、墓が故人の証であるだけでなく、モニュメントとして受容されていく掃苔文化の歴史をもつがゆえに、著名人の墓のデータベースはサイバースペースでもいくつも用意されている。これらはあくまで著名人とされる故人の墓のデータベースであり、MyDeathSpace.comのような一般の人びとの墓の情報は載っていない。死を受容するというよりは、墓を見るためのもの、故人の業績をなぞり返すためのものとして墓と対峙し、それらの記録を残している。これらのサイトの特徴として、著名人の墓を素材に、故人を紹介する体裁をとっているところにある。自身の足で稼いだ墓情報をもとに画像や映像をサイトに貼って、その時の墓の様子や墓所を伝えるとともに故人の略歴や仕事が付されることが多い。

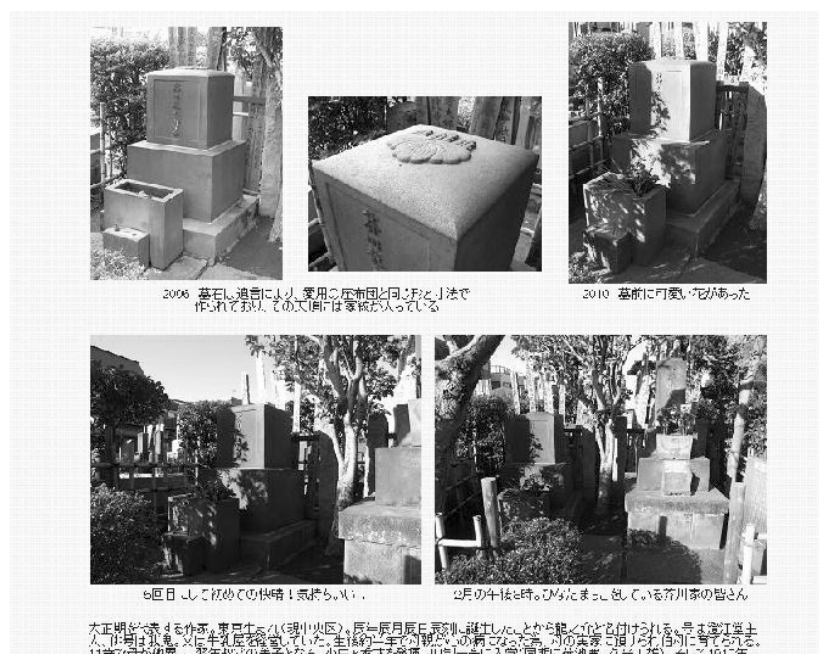


図2 「文芸ジャンキー・パラダイス」の芥川龍之介墓参のページより^③

「タブー視される死」を超えて

3-2. 弔い型

続いては、サイバースペースで墓参ができるサービスについて紹介していく。こういったサービスは、霊苑や墓石会社が、墓のオルタナティブとして提案されていることが多く、作成費・維持費ともに安いこと、手軽に「墓参」ができることをうたっている。

・「ネット墓参り」

「ネット墓参り」は、広く葬送に関わる業務に従事しているアイキャン株式会社が運営しているサイバースペースの墓である。図3は、「ネット墓参り」の故人ページのサンプルとして上がっていたもので、その絵柄にはいわゆる墓石が選ばれており、サイバースペースだからといって固有の墓像が選ばれているわけでもない。その証拠として、画面左に並んでいる柄杓や線香、花を墓石絵にドラッグすることによって、墓参りができるという仕組みになっている。その他、「故人を偲ぶ」タグをクリックすると、故人の名前、戒名、生没年月日、年齢、出身地、略歴、趣味、干支、そして写真が登録できるようになっている。これらの情報があることによって、故人のことを直接知らない人でも故人のことをおおよそ検討がつくということだろう。もう一つ、「記帳」ページも用意されており、オンラインで集った墓参者たちが故人に向けてメッセージを残す仕組みが設けられている。墓石の前で自分のうちに喚起されて暗唱されていたメッセージが、「墓」として一緒に記録される言葉の段階を得ることになった。

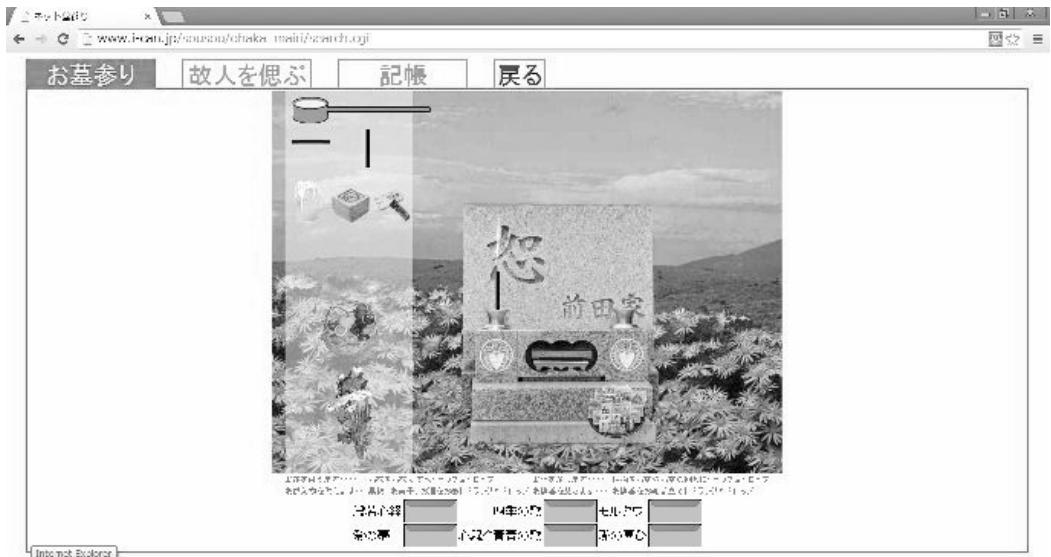


図3 「ネットお墓参り」故人ページ例④

お墓参り 故人を偲ぶ **記帳** 戻る

お墓参りをしたら、お墓をお参りします。
 記帳内容も、最近の100件を表示しています。

お名前				
I Val				
住所	本姓人	年齢	スレハ	性別 <input checked="" type="radio"/> 男 <input type="radio"/> 女
コメント				
記録します				

[12] 小やさん 訪問日 2013年01月24日(水)の朝18分 北海道 年齢 30代男 本古さん、戦争で銃とか撃つのが怖かったらしい。死因が毒みそで死んでおられたらしい。合掌。
[11] 孫さん 訪問日 2012年09月22日(水) 18時20分 未記入 年齢 60代女 小ばあちゃん、何となくお墓参りに「おなごこめんなさい、 明日にでも、ひ孫ちゃんが行く予定。まってね。
[10] 孫さん 訪問日 2012年08月12日(火) 18時42分 未記入 年齢 未記入 女 小やさん、お参りありがとうございます。 のみはあやちゃんの山笠祭り催いで、お、おが大好き。 今では「おこえ」を仁切って、お、お入主を返さています。
[12] 小やさん 訪問日 2012年07月28日(土)の朝20分 北海道 年齢 30代男 小やさん、お参りありがとうございます。

図4 「ネット墓参り」記帳ページ例⑤

・「サイバーストーン」

「サイバーストーン」は、血縁を超えての共同墓や合葬墓など、現代の家族・居住形態の多様化をふまえた墓のデザインを行う「すがも平和霊苑」によって管理運営されている、2008年に始まったインターネット上の墓である。

「サイバーストーン」は、インターネット上に建立されたお墓のことです。「サイバーストーン」とは、今、生きている証を記録する「自分史サイバーストーン」と、死後、生前と死後を複合化した「墓サイバーストーン」を統合した、21世紀対応型の「墓文化」の提案です。^⑥

との言葉にも現れているように、自分史を残したい人たちのニーズに応えるサイトとなっているところに本墓の特徴がある。写真と文章のスライドショーを登録できる「メモリアルページ」や年表を巻物調で記録する「プロフィールページ」、そしてデジタル・メディアならではの、自身のメッセージを動画で残せるサービスや思い出の地を Google Map 上に記録するサービスも用意されている。閲覧者やページの背景画像、音楽なども選択できるようになっている。基本料金の15万円の中に30年間保存保証が組み込まれており、墓石の価格相場が1体100万円であることを思えば保存期限が限られているとはいえ破格の価格ではある。墓石に刻まれる故人の情報が、名前、戒名、没年月日とごくシンプルなものに集約されることを考えると、いまあるデジタル・メディアの機能を駆使して自身を残す、ということが考えられることは自然な流れであると思われる。形こそ違えど、個々人の日々の記録、自分史化

「タブー視される死」を超えて

の延長上に故人という像が結ばれるという考え方自体は、今日的なメディア観の現れである。

加えて、オンラインでの墓を宣伝するにおいて強調されていることは、日常のコミュニケーションの密度と墓石への墓参との間とが釣り合わないということである。例えば、これは墓に限らず電子化される時に必ず言われることであるが、金銭的にも人間関係的にも電子墓の方がコストが軽減されるということである。後者で言えば、墓守という慣習を家系を基準に継承していくとなると、少なからず後継者が土地に縛られることとなり、それによって無縁墓になるのであれば、この点のコストを減らすという考え方にいくことはめずらしいことではない。故人や遺族にとっては、墓をつくることは自身を後世に残すことを表し、生前の故人の証となるような文章や映像など今日のメディアで記録可能なものを墓的に残したい、ということも強調される。はじめに触れた QR コード付きの墓もまさにそうであるが、故人の像を結ぶという時には名前の彫られた墓石だけでなく、故人の姿形や声という形で、オーディオ・ビジュアルに対面していくことの利便性がうたわれるのである。

3-3. 併合型

・ Find A Grave – millions of graves

本ウェブサイトは、1995年に、アメリカの Jim Tipton によって制作された墓のデータベースシステムで、著名人の墓参を趣味としていた Tipton が、オンラインで著名人の墓のデータベースを作り始めたのが始まりである。(図5) その後有名・無名に限らず、誰でもが故人のページをつくり、ウェブページを介しての墓参ができるようになった。一般の故人に関しては、“vital record”として、誕生や死亡、結婚証明にあたる書類を ancestry.com や archives.com のような他のデータベースと連携させており、公的に生まれて死んだことを証明することによって、データベース上の墓の存在が強固なものとなっていくかのような仕様になっている。

本ウェブサイト上の故人ページには、故人の写真と誕生年月日と没年月日、略歴、墓の場所・写真、そして、故人ページの下方には、“Leave flowers and note”のボタンがついており、そこをクリックすると 25 種類の花から 1 つ選ぶように要求され、その故人ページ上に花やメッセージが手向けられる仕組みとなっている。(図7)

このサイトを作った理由として、故人の記録が集合的な人文知データベースにおける貢献ができるということと、(オンラインで) 墓を参ることは、故人の生きていたという記憶を維持するのに役立つだろうということをやっている。ゆくゆくは、経済的、物理距離的な問題で現実空間の墓地に行けない人たちに対しても、故人への想いを届けるという意味で開かれたサイトになることを願うともあり、日々のパソコン業務の延長もしくは傍らで、故人を想うという形の墓参が行われるということを見ているのだろうか。当該ウェブサイトの FAQ を辿ると、毎日 70,000 人もこのサイトを使っているとの記述や、“109 million”

もの墓の記録が残されていることを考えると、場所の縛りを超えた「国際的な」墓地事業にも見えてくるのである。サイト運営者のいるアメリカの墓情報が一番潤沢に揃えられているが、他国間で比べると日本の登録件数が600を超え突出していることもまた興味深い事例である。



図5 Find a Grave のトップページの



図6 Find a Grave 内の芥川龍之介ページ⁸⁾

「タブー視される死」を超えて



図7 “Find a Grave” 故人ページ下方にある “Leave flowers and a note”

・BOSAN—墓参—アプリ

近年では、墓参を iPhone 上でも行えるアプリケーション「BOSAN—墓参—」がナレッジックス株式会社によって開発されている。機能としては、3-1で扱ったデータベース型のものに近い。自身で実空間にある記録したい墓石の写真を撮り、それをアプリに取り込み、プリセットされているアイテムを選んで墓参する方法をとっている。(図8) 墓参のアイテムでは、音楽の種類が豊富なことが一つの特徴として挙げられるだろう。蝉の鳴き声や川の音など自然の音の中での墓参だけではなく、音A、B、Cで街中の音が再現されていることも興味深い点である。特に音Aに関しては、町中の雑踏の音がプリセットされており、墓参の環境自体が日常の風景の中にあり、「タブー視」どころか、特別視されていないことの一例と言えよう。

本アプリに故人情報を取り込む際には、顔の写真、墓の写真、姓名(戒名・法名)、宗派/寺名、生年、没年、享年、思い出の場所とが一緒に登録できるようになっており、ユーザー自身が実際に墓参した訪問記録を残すことに一義が置かれている仕様になっている。故人の記録をデータベースとして蓄積し所有、そして気が向いた時に画面上で「墓参」をする。言い換えれば、ユーザー自身で故人の墓の写真を撮る、もしくは情報を集約するという時に生じる愛着を、SNSを介した開かれたコミュニケーションとは異なった形式で、自身の中で反

芻させる。この設計環境は、その趣味自体を平板な風景の中に落とし込むこともあるが、逆にその趣味に対する親密さを助長させることにもなるだろう。



図8 「BOSAN」アプリケーション起動画面

4. ソーシャル・メディアにみるアカウントの死に関するシステム

4-1. Facebook の追悼システム

3-1、3-2、3-3と、サイバースペース上で死をデータベースとして、もしくは墓として記録する仕組みとして、新たに電子空間上に墓サイト=場をつくっている例を取り上げた。本節では、墓的な機能をもつものとしてつくられたわけではないが、結果として「墓」的な存在になってしまう SNS アカウントから喚起される死の受容について考えてみたい。

3-2の最後に、故人の像を結ぶ時に故人の姿形や声といった、現代のメディアが像として保存可能にしたものが、墓が保存する機能のひとつとして取り上げられつつあることについて指摘した。前節までに述べてきたことは、実空間の墓からサイバースペースへという場所の増大、拡張という点では新たな展開と言えるものの、故人を記憶するものとして新たに墓をつくるという点においては共通している。そこで、本節で新たに上げたいことは、望む、望まないに限らずとも、日々の記録として残してしまう SNS でのコミュニケーションの結果、その個人ページが墓的な機能を持つてしまうのではないか、という事例である。

死後のアカウントをどのように管理するかについては、昨今ではエンディング・ノートの一項目として挙げられるなど、自身の生前管理事項として認められるまでになっている。ここで上げたいことは、Facebook での死後アカウントとの対峙の仕方である。こと

「タブー視される死」を超えて

Facebook においては故人のページが存在し、死後の自身のページ上のステータスを「追悼(memorial)」にすることができるようになっている。

追悼アカウントへの移行:

Facebook はリクエストを受理し、それが正当と認められる場合に、亡くなった方の Facebook アカウントを追悼アカウントに変更します。Facebook では、亡くなった方のお友達やご家族への配慮として、追悼アカウントが Facebook に表示されないように措置いたします。同時にそのアカウントを凍結することで故人のプライバシー保護に努めます。⁹⁾

そして、「故人の近親者であることを証明できる方にかぎり、故人の Facebook アカウントの削除をリクエストできます。」として、追悼アカウント申請のページをリンクさせている¹⁰⁾。申請のページでは、亡くなった方の氏名(アカウント名)、報告したいタイムラインのリンク、アカウントに登録されているメールアドレス、亡くなった方との関係(家族、親戚、家族以外)、いつ亡くなったか、死亡を証明できる書類(死亡記事またはニュース記事リンク)、そして希望する変更内容として「アカウントを追悼バージョンに変更」が選択できるようになっている。追悼アカウントにすることによって、そのアカウントに他の誰もログインすることができなくなり、日々の友人たちとの関係性の中で、故人の誕生日に突如として「今日は〇〇さんの誕生日です」といった情報があがってくること、友人の候補として故人があがってくるような事態を防ぐことができる。4-2以降で触れるように、追悼アカウントはその後、故人への追悼メッセージを表示する掲示板として機能し、故人の友人や関係者たちが故人に向けてメッセージを残している例もあるようだ。

このような Facebook の仕様については賛否両論がある。亡くなった後もアクティブにアカウントが動いていることは奇妙であるから、死後のアカウント管理にまで設計が及んでいるのはよいといったものから、追悼アカウントにするかどうか、親族の間で意見が分かれた場合にどうするのか、故人のアカウントを電子空間に「開いて」置くことによって、故人の死因に関する流したくなかった情報が、故人のアカウントを基点に流れてしまう可能性等々が語られている¹¹⁾。最も、アカウント所有者の死後にウェブログや掲示板といった運営ウェブページが「荒地地」にならないようにするにはどうしたらよいか、という点に関して言えば、SNS が広がる前から検討、議論されてきたことでもある。例えばウェブログについて言えば、死後のウェブログページの管理は各社によって対応が異なるが、著名人のブログは、ブログの運営者側でコメント欄が荒れないように管理し、ファンたちの集う場になるといった動きも出てきている¹²⁾。

4-2. Facebook と死の受容—アメリカでの研究を事例に

それでは、Facebook に代表される故人のアカウントの死後管理について、どのような分析がこれまで為されてきたかについて整理していきたい。Myspace と Facebook での故人アカウントページの使われ方については、コンテンツ分析とインタビュー調査の形で Brubaker らによってまとめられている。

2010年に発表された論考では、分析対象として故人ユーザーページにポストされたコメント、ユーザーへのインタビュー、MyDeathSpace.com のテキスト、そしてこれらに関する他の SNS での投稿や新聞記事が挙げられており、死後のアカウントページがどのように運営されてきたかという分析から、これらの資料から故人像がいかにつくられるかまで踏み込んだ文献となっている。この論文のキーワードとして、intersubjectivity (間主観性) と technospirituality (デジタル・メディア信仰) が挙げられている。前者のアイデンティティとは、他者のためにつくられ演じられるものであり、作者の死後も影響力が生じ続けるというポストモダン思想を引き合いに出しながら、個人ページのウォールに表示される他者から故人へのコメントもまた、故人プロフィール形成に貢献し、それは死後にまで半永久的に続く関係性なのだ、と指摘している。「他者のために」という方向だけでなく、他者との相互補完的な関係性の中でという観点から考えれば、ネットワークを通じて偶発的に再構成されるアイデンティティもまた、社会的に付与されるものとして考えることができるだろう。このように、web2.0の相互のコミュニケーション・システムが、「社会的死」を恒久的に担保する、つまりは「社会的対象として生き続ける死」を支えるものとしてあり続ける、とも考えを展開することもできる。更には、SNS 自体が普遍的なアーカイブ・ディレクトリーになりつつあることにも言及し、残された人々によって故人のアカウントが管理され、時に SNS を通じて故人のアカウントから死が伝えられることもあるなど、故人アカウントの管理を積極的に行う遺族の事例も多いということであった。そうすることによって、故人像が個々の残された人々たちの間で構成され続け、残された者たちの死の受容プロセスに大きく貢献するという点でもある。

もうひとつのキーワードである technospirituality とは、時間や空間の制限を超えて、メディアによって維持される神と自身との関係性を論じる時に使われる言葉であるが、SNS でのコメントに「神がまた私たちを合わせると決めた時に会いましょう」や「天国で会いましょう」といったものが多用されている点からも、SNS を通じたコミュニケーションを technospirituality のもう一つの形と考えることができる、と筆者は述べている。電子メディアを通じてのコミュニケーションの形が眼に見えるものでないからこそ (“Invisible”)、こういった故人とのコミュニケーションを可能とする感覚を共有できるのではないかと、との分析がなされている。後続の論考において、Brubaker らは Facebook ユーザー16人に対してインタビュー分析を行っている。家族や友人の死後のアカウントについてどのように思うかに

「タブー視される死」を超えて

ついでにインタビューを引いてみると、“I thought no different than putting flowers on a grave.”といった意見から、“to be honest, I just don't think death on Facebook is ever appropriate. I feel like all that's doing is attention calling”といったものなど、故人と生者の間、そして生者たちの間での死の受容の捉え方が異なっていることがわかる。(Brubaker, 2013:13-14) 共通していることは、故人のウォールにコメントをする・しないに限らず、Facebook を通じて故人を思い返し、それぞれのやり方で普段とは異なる葬送の時を画面の前で過ごしているということである。この点において、Facebook は日常の延長にあるもう一つの墓石となりつつあるとも言え、同時に墓石の存在意義自体も変容しつつあるということでもあるだろう。

5. おわりに

今日においては遺族がデジタル・メディアを通じて遺書までも公表するなど、死後の情報管理・開示の方法について声高に言われるようになって久しい。本論では、まずはアリエスの「タブー視される死」を手掛かりにして、死の社会学において語られてきた死との距離について引きつつ、もうひとつの展開として、サイバースペースですでに起こりつつある死をめぐる諸展開について概観してきた。サイバースペースではすでに、①故人の死をデータベース的に参加型のシステムでもって集約し、生者同士が情報を交わしあうサイトや、②弔いを重視したサイバースペース上の墓、そして①と②のどちらの機能も併せ持った③併合型のサイトとが存在し、個人の公的情報データベースとネットワークを形成しながら維持されている。その結果、全くその故人について知らない人でも、上記のウェブページからログやリンクを辿っていく中で、ある程度の密度をもった故人像を結ぶことができるようになってきた。

そこに、新たに出現しつつあるのが4節でふれた SNS コミュニケーションの延長上にある死の受容である。そもそもの Facebook の機能として、日々のつぶやきのほかに、誕生日や結婚といったライフイベントをユーザーたち間で共有する、という機能がある。命日も言うまでもなくメモリアルデーとして保存され、命日にはまた故人ページのウォールにてさまざまな場所から悼みのコメントが寄せられるのである。ここで、Brubaker らの興味深い示唆として、死者との関係性が *out there* になったのではなく、*here too* になったという指摘もある。(Brubaker and Vertesi, 2010) 遺体や遺骨の代わりとして、故人の写真やコメント、友人たちとの繋がりさえもが故人の証として信用にたるものとなりつつある。このことは、日本での「タブー視される死」から「日常の延長にある死」にいたる死の受容研究として展開可能なキーワードと思われる。

今回は、その端緒となる Brubaker らの研究考察に触れるだけに留まったが、サイバースペースでの自己形成や技術信仰といった、情報学、メディア論の分野での先行研究と、日本

の土着の葬送文化とも重ねながらの更なる分析をすることによって、サイバースペースにおける死の受容分析がより分厚く、時代に近接したものとなることが期待される。「タブー視される死」から「日常の延長にある死」へ、「あちら」から「こちら」へ。可視化されないコミュニケーションにも目を配りながら、サイバースペースにおける死の受容について今後も分析を進めていきたい。

参考文献

- Aries, P., *L'Homme devant la mort*, Ed. Du Seuil, 1975. (=成瀬駒男訳『死を前にした人間』、みすず書房、1990)
- , *Essais sur l'histoire de la mort en Occident du moyen age a nos jours*, Editions du Seuil, 1975 (= 伊藤晃、成瀬駒男訳 『死と歴史』、みすず書房、1983)
- 浅利宙、「現代社会における「死の社会学」—「タブー視される死」の再構成を通して—、人間科学共生社会学 1、pp.63-79、2001.
- Brubaker, J. R. & Vertesi, J.. *Death and the Social Network*. Presented at the CHI 2010 Workshop on HCI at the End of Life: Understanding Death, Dying, and the Digital, Atlanta, GA., 2010.
- Brubaker, J. R. and Hayes, G. R. "We will never forget you [online]": An empirical investigation of post-mortem MySpace comments. Proc CSCW 2011. 2011.
- Brubaker, J. R., Hayes, G. R., and Dourish, J. P. *Beyond the Grave: Facebook as a site for the expansion of death and mourning*, The Information Society, 29, 3, 2013.
- Elias, N. *Über die Einsamkeit der Sterbenden*, Francke Verlag. 1969 (= 中居実訳、『死にゆく者の孤独』、法政大学出版社、1990)
- Erving Goffman, *The Presentation of Self in Everyday Life*, 1959. (=石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示』、誠信書房、1974)
- , *Interaction Ritual: Essays Face-to-Face Behavior*, 1967. (= 広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学』、法政大学出版社、1986)
- 藤井美和、「大学生のもつ「死」のイメージ：テキストマイニングによる分析」、関西学院大学社会学部紀要 95、pp.145-155、2003.
- 後藤隆 「インターネット上での死の誘惑」、(竹田純郎、森秀樹、伊坂青司編 『生と死の現在—家庭・学校・地域のなかのデス・コミュニケーション—』、ナカニシヤ出版、pp.86-101、2002)
- 中森弘樹、「「無縁死」概念の社会的意義—死の社会学におけるその位置づけをめぐって—」、社会システム研究、第14号、pp.157-168、2011.

「タブー視される死」を超えて

澤井敦、『死と死別の社会学—社会理論からの接近』、青弓社、2005。

関水徹平、「社会的死の構図：現象学的社会学の視点から」、早稲田大学大学院文学研究科紀要。第1分冊、哲学 東洋哲学 心理学 社会学 教育学、55、pp.105-118。

Sudnow, David, *Passing on: The Social Organization of Dying*, Englewood Cliff, NJ: Prentice-Hl. 1967 (= 岩田啓晴、志村哲郎、山田富秋訳『病院でつくられる死』、せりか書房、1992)

脚注

(1)「石の声 株式会社」<http://ishinokoe.co.jp/> 2013年10月30日参照。

(2)株式会社セレージャテクノロジー「アジア各国の10月 Facebook 推定ユーザ数を発表しました」<http://www.cereja.co.jp/press/2013/10/10facebook.html> 2013年10月30日参照。

(3)「作家の墓」<http://kajipon.sakura.ne.jp/haka/h-n-sakka.htm#akutagawa> 2013年10月30日参照。こちらのサイトの著者カジボン・マルコ・残月は、『東京・鎌倉 有名人お墓お散歩ブック—誰もが知っている104人の墓碑完全ガイド』（大和書房、2005）を出版するほどの「墓マニア」である。他にも情報が豊富なデータベースとして、下記の3つを挙げておく。

・「日本の墓 有名人・著名人のお墓のデータベース」<http://www.hakaishi.jp/> 2013年10月30日参照。京都にある「株式会社亘徳」が運営しているサイトで、墓のデータベースだけでなく、「吉相墓」や霊園、仏壇情報など、葬に関わる情報が満載のサイトである。

・「私の掃苔録」<http://www.castanea.jp/memorial/indexFF.html> 2013年10月30日参照。墓参趣味のある個人が運営しているサイト。著名人の墓の写真が映像として流れるほかにも、BGMを選んで流すことができるなど、デジタル・メディアの演出を凝らしたサイトとなっている。

・「掃苔之友青山」 2013年12月に始まったばかりの新しいiPhoneアプリケーションで、青山墓地の著名人墓地の場所をグーグルアース衛星画像上に配置し、GPS機能を使うことによって今いる場所の近くにどの墓があるかを知ることが出来るなど、掃苔の電子的サポートアプリケーションとして期待されている。

(4)「ネット墓参り」http://www.i-can.jp/sousou/ohaka_mairi/search.cgi 2013年11月10日参照。

(5)上記に同じ。

(6)すがも平和霊苑、「サイバーストーン インターネット墓にあなたの思い出・足跡を記録」、<http://www.cyber-stone.jp/HP/index.html> 2013年11月10日参照。

(7) Find a Grave—millions of cemetery records, <http://www.findagrave.com/index.html> 2013年10月30日参照。

(8) Ryunosuke Akutagawa (Find a Grave サイト内), <http://www.findagrave.com/cgi-bin/fg.cgi?page=gr&GRid=9607183> 2013年10月30日参照。

(9)「亡くなったユーザーについて、アカウントの追悼を申請するにはどうすればよいですか。—Facebook」<https://www.facebook.com/help/150486848354038> 2013年11月10日参照。

(10)故人アカウントの処理の仕方については、Facebook を筆頭に SNS 各社によって規定が決められつつある。例えば Twitter では、Facebook の申請事項に加えて、故人の死亡証明書のコピー、ご自身の政府発行身分証明書のコピーといった書類の提出を求めており、申請者故人の情報を公証文として要求するなど、いたずらに故人申請できないような仕組みをとっている。

(11)Facebook の追悼アカウントについては、インターネット上で多数の言及がなされており、それらを見るにおいてもこの問題への関心の高さを伺うことができる。主なものとして、「Facebook への批判」の「記念碑」の項を参照した。(<http://ja.wikipedia.org/wiki/Facebook%E3%81%B8%E3%81%AE%E6%89%B9%E5%88%A4> 2013年11月10日参照)

(12)例えば、2008年に亡くなったタレント飯島愛のブログは、亡くなって5年経つ今でもファンたちによる書き込みが続き、荒れることもなくオンライン上での「墓」的な機能を持ち続けている。「ポルノ・ホスピタル」<http://ameblo.jp/ijimaai/> 2013年11月10日参照。

「タブー視される死」を超えて

Beyond “The Invisible Death”

—Reconsidering the way of sharing deaths in online communication—

Jun ABE

How do we share our deaths among the bereaved family, friends and others? Tombstone is one answer of this. Death is thought as “The Invisible Death” for people physically and socially. However recently according to digital communication being occupied an important position in our daily communication, the concept of death is also expanded to and emerged online. This thesis aims at preparing for reconsidering practices of online memorialization connected to conventional ritual of grief and mourning. Based on listing up examples of sharing deaths online sites and referring to previous works about SNS users and death, I examine online communication as new functions in which public mourning takes place.

Keywords: death, digital media, cyberspace.